静岡大学附属図書館

図書館通信 —12—

1971. 11

賢明な受容性

〈私にとって図書館とは何か〉

太田芳三郎

感心した話ではないが、私はあまり熱心な図書館の利用者ではない。大学のといわず公立のといわず、およそ図書館なるものは、過去および現在の私とは、劇的な出会いを持たないままに存在してきた——偽悪でも偽善でもなくて、これがいつわらない告白・心境あるいは私の実態に違いない。

だからといって、私は何も図書館の存在を否定したりはしない。語学教師のハシクレとして、その大切な文献を所蔵している図書館に、親近感や敬愛の念を抱きこそすれ、それを黙殺するなどの考えはさらさらない。ひとさまのケンイを借りると、私もまた次のような生き方に共鳴する人種であるらしい。

People say life is the thing, but I prefer reading. (L. P. Smith)

世の中にまじらぬとにはあらねども
ひとりあそびぞわれはまされる　　(良寛)

前者は美しいアフォリズムだし、後者は行灯のかげで老僧が頭巾をかぶり袖無しを着て膝の上に本をひろげている自画像への画賛であった。

そういう心情の自分なのに、他方立派な図書館でありながら、上手にそれを利用しないのは、要するに、私の方がよくないに決っている。ただそれだけの話であるにもかかわらず、思いもかけず「図書館について記せ」という課題が舞いこんできた。そこで、顧みておのれを戒めるとともに、私にとってそもそも図書館とは何かという原点を、胸に問い返してみることにした。他の人びとはもっとすぐれたチエを出すであろうが、以下が私なりのその解答である。

導入部にあわせてよろしからぬ怠け者の口実をキッカケにすると、ただちに次の三点に思い当る——それらが除去され、あるいは補足されることによって、図書館と私との距離が急速にちぢまってくるであろう要因が。

(1) もともと庶民のための教養施設でありながら、図書館は、少なくともわが国では、なじみの薄い存在ではなかろうか。

このことは、先に示唆したように、私たちが読書をしないというのと同義ではない。その質はともあれ、むしろわが同胞は有数の読書民族に属しよう。ただそうした精神の風土をはぐくんできたものは、決して図書館ではなくて、もっと身近な貸本屋・古本屋、とりわけ書籍の小売店なのであった。本が読みたくなれば、その本屋さんへとんでいく。そこにある数千冊は完全なOpen Shelf である。ほしいものはその場で手に入れるが、高価にすぎる書物なら立ち読みに日参するという手がある。そこに必要なものがなければ、数軒をハシゴする。むろん予約注文もできれば配達もしてくれる。誰が好きこのんで図書館を利用するだろうか。

図書館をめぐる状況は、この点で、社会主義国はもとより、たぶん欧米とはかなり違っている。拡大解釈は慎んで一例を挙げると、人口約40万の私の知るアメリカの中都市には、軽い読み物類を置いたドラッグストアを除けば、本格的な本屋さん(地階が古本のセクション)は五軒ぐらいしかなかった。七つの分館を持つ市立の図書館よりも数が少ないのだ。図書館へ行って、あるいはそこから借り出して、本を読むものという先入観念は、新旧の世代を通じて確立しているらしい。それが静岡市なら、書籍を取扱う店(古本をふくめて)はおそらく30軒をくだらないであろう。こうした環境のなかで、図書館は、勤勉な小売商とその熱心な顧客たちとの同盟軍にとうてい太刀打ちできないのである。

そうはいうものの、私たちもよく承知している――「コトゴトノ書ヲ信ズレバ書ナキニシカズ」ということを、世のなかには良書以上に遙かに悪書が多い。センセーショナルに宣伝されたものは時に案外つまらなかったりする。まして、地味な学術書はひどく冷遇されたり、しばしば日の目をみないウレイさえある。GNP偏重思想と同様に、昨今の商業主義のもとで、外装の華美は内包の堅実に必ずしもマッチしていないのだ。ここに個人の恣意を越えた図書館の拠って立つ公正な社会的な基盤があるに違いない。

(2) その基礎を踏まえて、図書館の側からもっと効率的なPRが行なわれてもよいのではなかろうか。

来る者は拒まないが、縁なき衆生は度しがたい――今まではそれでよかった。また、本屋がいわばモノとしての書物の授受にのみ関与するのに対して、それとは次元を異にして、ココロとしての本の内実に参入することこそ図書館本来の使命だという自負が、当事者にあるに違いないし、そうあってほしい。けれども、私たちの日常生活の時間帯を占有しようと競合しひしめきあっている要因は、従前と違って、めまぐるしくもつれあって渾沌状態にある。眼を奪い耳を襲い、あるいは全力投入を挑む刺戟が何であるか。今さらここに列挙するまでもあるまい。

あくまでも静かな姿勢を崩そうとしない図書館は、故に、そうした知識情報の氾濫に時に呑みこまれてしまうオソレがある。しかし、書物への愛情・良書への招待・それを通じて人生なり真理なりに人を開眼させることが図書館至上の任務ならば、進んでキメのこまかい積極策が打ちだされてよいであろう。

小さな親切にしても、「図書館通信」はいい企画だし、ことに「私のすすめたい本」はもっと充実されるべきコラムであろう。特定のテーマにしぼって読書会・講演・セミナーが定期的に行なわれている図書館も少なくないと聞く。ちなみに、「静岡県郷土の文学碑」は、県文化協会の発想ながら、データ・写真も豊富で、近頃楽しい試みであった。ただ主要なそのスタッフのなかに静大の教官が参与しているところをみると、ムザムザよそに取られるべきではなかったろうに！

そのためには、少なからぬ準備も必要であろう。書誌目録の整備・予算の充実・定員の確保――そうしたツライお家の事情を訴えるいわば裏方さんの嘆きが、素人の私などにも聞えないわけではない。にもかかわらず、裏方さんの仕事は、表の檜舞台あってこその生き甲斐なのだから、時に渾身の力をふるって礎を据え柱を立てる工夫がほしいものである。

(3) そのような新しい芽生え・経常的な運営に加えて、そろそろ長期的なヴィジョンを持ち特定の主題を選んで、その蔵書の一部にクッキリとした個性を刻みこむべき頃かと思われる。

図書館の性格上、オール・ラウンドな資料の蒐集はもとより不可避の要請ではあるものの、もし従来の力点が'something about everything'に傾いていたならば、この辺で'everything about something'の方向にもバランスを保ったら、どうであろうというのである。たぶん天理大学の図書館がその例であろう。郷土資料の収集が見易いサンプルながら、特定の主題は衆智を集めて検討すればよい。問題は、日常のルーティーンを越えた次元で、それを着実に推進していく不屈の意志と努力なのである。ついでながら、最近浜松に懸案の美術館が誕生したが、これは篤志の医師の半世紀にわたるコレクションを中核として出来上ったものと聞く。底に流れている気魄がやはり人の心を打つものである。

そして、特定の地域にむける図書館が、立つも倒れるのも、そうした独自のフィーチャーによると思われる。

要するに、以上が極めて常識的な解答であるが、こういうことを考える根底に図書館に寄せる私なりのイメージがなくもない。それを述べることによって、小稿を締めくくることにしよう。

比喩的にいって、私は付属図書館を大学の盲腸とも心臓とも考えていない。無用の長物でもなければ、時々刻々搏動を続けている活動の主体でさえなくてもよいと思う。むしろ、それは頭脳であり知性であり、時に休息していても、求めに応じて情報を提供できるメモリ・プレートになぞらえるべきかも知れない。

そう、ここでふと思い出す言葉がある。

「もしもあなたが人類の創造性の歴史を振返るならば、偉大な営為・功業の数々は、それが芸術であれ道徳であれ、さらに知的な創作ないし科学上の発見にしても、静かな瞑想と一歩退いた沈潜の時期をくぐりぬけたのちにはじめて

成就されていることに気付かれるだろう。」とジュリアン・ハックスレ　は述べている。「疑いもなく、すぐれた芸術家には、しばしばおのれの心をむなしくして、すべての受容する、そんな一時期が必要なのだ。最も卓越した業績は、ワ　ズワースののいわゆる『賢明な受容性』と熱烈な創造活動とが互いに交錯するところに、産み出されるものであるから」と。

ワーズワースのいうwise passiveness－少なくとも私にとって、これが図書館像なのである。いや、今少し広く教育にも包みこんだ文化伝達者（Kulturträger）に寄せるイメージがそれだといっていい。

さらに具象的には、図書館は、私にとって、波立たない水面の・澄みきった・底の深い・知識情報の人工湖ないし貯水池なのであろう――そこに流れこむ数々の奔流を大きく抱擁しながら、しかもなお、必要に応じておのれ自身が強烈なポテンシャル・エネルギーを放出できるところの。　（教養部　英語　教授）

図書館の改革について

浜松分館長　市川常男

図書館改革についての原稿を図書館通信の編集委員会から依頼されたが、格別の抱負とてない小生は面食った次第である。しかし考えてみると浜松分館長として7年目にもなるから、少しは何か考えていることがあるはずであるとの御推察によるものと思われる。申し訳ないことであるが、6年半の間に図書館学なるものはさっぱり勉強しておらない。しかし分館長としての仕事をしたり、種々の経験に基く感想ぐらいは若干持ち合わせているので、気のついたことを書き並べて責めを果したい。もちろんピントの外れた意見や実現が困難な内容もあるかと思うが、図書館に対する一つの夢として御容赦願いたい。

まず図書館は教官の学問研究、学生の学習のセンターでなければならない。従来教官の研究に必要な学術資料の収集は各研究室に委ねられ、学生の学習に必要な図書は各学生の個人的購入に依存して来て、図書館は主として教養図書の購入、閲覧に重点がおかれて来たのが実情である。したがって図書館をほとんど利用しない教官や学生があり得たわけである。

しかし学術情報量が過大となった今日、個々の教官によってのみ必要な資料を収集するのはきわめて困難となっている。学生についても、大学設置基準によると1時間の講義に対して2時間の自学自習が条件となっているが、その自学自習に必要な図書と場所を提供するのが図書館でなければならない。また大学における学習は教授から与えられた知識を丸暗記するのではなく、将来一生に亘って学問（教養のためのものを含む）をし調査研究をするに当って、その方法を学び取る場が大学でなければならない。各種図書資料を利用して必要な勉学調査をする能力を得ることが肝心であり、その場を提供するのが図書館である。残念ながら従来の図書館はこれらの条件を充たしているとは考えられない。では今後どのようにしたらよいだろうか。

1. 基本的学術資料の収集

大学は申すまでもなく学問研究の場である。教官が研究をするに当って必要な基本的資料は是非とも図書館として揃えなければならない。必要な学術資料を全学的に検討して、系統的に購入する必要がある。学生用の学習図書については、指定図書制度の発足によって逐次充足されつつあるのは喜ばしいことである。

2. 学術資料の集中化

全学の教官の利用の便を考えるならば、できるだけ図書・雑誌は図書館に集中化するのが望ましい。しかしその場合、教官に対するコンテンツ・サービス、複写サービス等が伴なわなければならない。特殊の分野の資料が研究室に分散配置されるのは止むを得ないが、その場合学術雑誌目録等が完備して常時その所在が直ちに判明し、随時閲覧できる体制になっていなければならない。検索の機械化も今後の重要な課題である。また集中化によって重複購入の無駄をなくすこともできる。浜松分館では昭和46年度に外国の学術雑誌の重複購入が延べで43種類（年間約90万円）あったが、分館の新築に際してこれを整理する方針を取り、来年度は重複を16種類減らすことになった。

3. 閲覧室の整備

閲覧室は十分なスペースを有し、快適な環境でなければならない。図書管が教官研究室の延長、学生の書斎代りであるならば、閲覧室はそれに応えるだけの内容でなければならない。研

究・勉学の場にふさわしい落ち着いたふんいきであるとともに、親しまれくつろげる場所でもありたい。

4. 職員のサービスの向上

図書館職員は単なる書庫の番人ではなく、教官、学生が研究、勉学のために検索する際のレファレンス業務に力を注いでほしい。そのためには教官の研究と学生の勉学内容の概要を常時承知していて、随時協力できるだけ勉強が必要である。また夜間開館の拡大も今後の課題である。

以上図書館に対する注文を並べたが、それを具体化するためにはまず予算と定員の確保が必要である。現在のように教官研究費、学生経費として文部省から配分された校費から図書館経費を捻出するのではなく、別途に図書館経費（維持費と図書購入費）を文部省で十分に計上して貰いたい。それまでの暫定措置としては、学内で校費（人件費を除く）の一定の%を図書館経費として決めておくのが望ましい。図書館関係者は図書館経費獲得のための努力から解放され、本来の業務に専念できるようにしたいものである。

また職員についても必要な定員を決めて、全学的な立場でその充足を考えるべきである。また学科新設等に伴う職員定員増の一定の%を図書館職員とするようなルールをつくりたいものである。

図書館講演会

8. 30　31

本年度初の試みながら8月30・31日の両日、当図書館主催の講演会が本館に於いて開かれた。言う迄もなくこの講演会は、大学図書館として数々の問題が山積しているにかかわらず、日常の多忙業務に追われ、外部研修の機会にもあまり恵まれぬ当館員の内部研修の意味で企画されたが、県内大学図書館関係者にも呼びかけた結果、両日にわたり当館員25、20人、当大学図書委員4、1人、学外者8、7人の参加がみられた。テーマは館員側の意見をとりまとめた上で「大学図書館の管理運営について」とし、講師を求めたところ、幸いにして慶応大学文学部図書館学科主任教授沢本孝久氏にこの任をお引き受け頂けた。

第1日目は大学図書館の管理運営について大学の教育・研究の役割、大学の知識の保管・提供所としての図書管と情報の関り合いの三方向から今後の大学図書館のいき方が論ぜられ、その果すべき機能として、無用の重複を避けた巨視的計画に基く情報資料の最も有効でシステマティックな選択と収集、それに対応する図書館相互協力や資料のマイクロシステム化の必要性、各学問領域に適合すべき文献探索サーヴィスの重点的拡充がとりあげられた。ここでは特に近年科学史家として注目されているD. K. Price の著書「リトゥルサイエンス・ビッグサイエンス」より指数函数的情報量の増大について引用され、大学研究者の有効情報獲得の難易度の増加を示すと共にこれに対処すべき図書館の姿勢を問うたのはタイムリーであった。これは図書館が体系化の時代から信用化の時代へ移行すべきことを示唆しているのであるが、しかしながら、図書館員はこれ迄の不信の念を取り払う為に、どんな状況下にあろうとも自己研修の努力を怠らぬことが、役割に明白だが運営は思うにまかせぬ大学図書館の現実にあって何よりも肝心であると結論づけられたのは、我々にとって痛切の感であった。

第1日目の管理運営概論に代り、第2日目は当館の例も交えて日本の大学図書館の管理運営の現実論が展開された。一体に国立大学図書館の運営方針は今迄無いに等しく、現実の利用状況に関する調査分析もあまり行われていない。大学の中で忘れられた存在の要求を、その全てに対して充足させられるとは限らないにしても、図書館としては把握すべきではないのか。学生との接触がある部分では図書館の日常業務の中にきめ細かに折り込まれ要求が把握されて、図書館の方針と均衡をとる必要がある。このUser needを生かすことを管理運営の第1ポイントとするなら、第2ポイントは、自館内部事情に精通することにより利用者の反応を予測できる人材育成とシステム作りである。図書館動作のコントローラーたるべき館長の責任の重要性、分類や目録といった図書館サイドの体系を利用者の要求に翻訳するレファレンサーや主題専門家の育成は勿論のこと、システムの非論理面を排除していく為のロジカルフローチャートの必要性等が強調された。

両日共講演後、数々の質疑応答がなされたが、大学図書館の集中管理制・分散管理制の効率に関する事項が大勢を占め、当館の直面する問題としてこの実際上の運用の難しさが印象づけられた。

（6ページ右下へつづく）

私のすすめたい本

理工系学生諸君のために

中村　勲

巨大システム産業として、宇宙開発産業に続いて、海洋開発産業、情報産業が全世界的に成長しつつある。

海洋開発については、世界人口の爆発的増加からして、陸地の二倍以上の面積を占める海に注目し、開発を進めてゆくことは極めて自然である。海は無限の宝庫であって、生物資源・鉱物資源は勿論のこと、潮汐・波浪等のエネルギー資源もある。さらに宇宙開発とは趣きを異にし、人間の生活空間の拡大にも繋がるものである。次の情報産業であるが、これはエレクトロニックスの進歩にともない、情報の伝達は勿論のこと、コンピュータの出現と普及によって、情報の高速、大規模な処理が可能となり、情報の価値が極めて高く評価される様になってきた。現代では物質、エネルギーとならんで情報が3本の柱を形成し、情報化社会といわれる様に、社会自体が変貌しつつある。その原動力をなすものが情報産業であろう。かようにコンピュータの発達した情報化社会で、人間の主体性はいかに位置づけられるか、一体人間にとって、科学・技術とは何かという問題にも直面する。また、これらの技術革新の時代において、教育・研究は如何にあるべきかと考える事も非常に重要な事であろう。

さてそこで、読書の秋の読物として、これらに関する本を各一冊づつ取り上げてみた。一般向きではあるが、専門的に内容の豊かなもので、かつ厚さも手頃、値段も手頃ということから、500円前後の本に限定した。更に内容の新規性からいって、出版の比較的新しいものという観点で選んだのが、次の本である。

① 桜井健二郎：海洋と情報（海洋開発シリーズ4）共立出版
② 坂井利之：情報学 ── 工学者の新情報論（筑摩総合大学21）筑摩書房
③ 川上正光：一工学者のねがい ──二十一世紀を日本の世紀とするために　共立出版

なおこれらの本の著者は皆電子工学に関係のある方々である。

まず「海洋と情報」について。海洋開発といっても色々な側面があるが、この本では海洋の実体をいかにしてとらえるかについて書かれており、その手段は、大部分電子技術の応用である。かかる意味では「海洋とエレクトロニックス」といってもよい様な本である。この本の著者はレーザの研究者なので、レーザの海洋への応用の可能性も取り上げている。内容は海と情報、海洋と計測、音と海洋、光と海洋、電磁波と海洋、海洋空間と情報システム、海を利用した情報伝達、海洋開発と先行的技術、海洋開発と情報等である。なお図が多くて読み易い本である。筆者もかって海洋の計測の研究を行っていた事があるので、最近この方面が漸く進歩し始めたことを喜びとするものである。

次に「情報学 ── 工学者の新情報論」について。著者は「情報工学にたずさわる者として、この情報の問題の現代的意義、その考え方、扱い方を述べてみる積りである。」と述べている。内容は、第Ⅰ部情報基礎論、第Ⅱ部情報工学、第Ⅲ部情報化社会の工学と人間　よりなる。内容として相当程度の高いことを出来るだけ平易に解説しようと努めているが、然し「総合大学」というシリーズの一冊なので、第Ⅱ部ではある程度の基礎知識がないと、読みこなせない所もあるであろうが、第Ⅲ部と第Ⅰ部の一部の適当な項目を読むだけでも、教養的には情報学について、明確な輪郭を知ることができよう。

最後に「一工学者のねがい ── 二十一世紀を日本の世紀とするために」について。この本の著者は、現在東京工大工学部長であって、電子通信学会の会長をされたこともあり、また同学会に教育技術研究会を発足させ、その委員長をなされるなど、研究面は勿論、教育の面でも深い造詣を持たれている方である。工学部の先輩（浜松高工出身）であって、浜松へ来られるたびに、広沢にある40年前の下宿に必ず立ち寄られる。この本は、著者が折々に書き残したものを集めたものであって、独自のユニークな文章できわめて読みやすく書かれている。なお一昨年の暮近く、学生諸君の要望で、著者が工学部に講演に来られた折、出版されたばかりのこの本を講演料に相当する分、学生諸君に寄贈されたと聞いている。内容は、一工学者のねがい ──ニュー・ユートピアの建設のために、横目でみたアメリカの工業教育etc.、二十一世紀を日本の世紀とするために、エレクトロニックスに志ざす人びとへ、わが師・わが友、付録（討論会）教育・研究・製造体制はこれでよいのか、よりなっている。　（工学部電子工学　助教授）

■ 図書館委員会報告

昭和46年7月30日

（第2回）　於　本　館

(1) 法経短大図書の移管に関する「覚書」について審議した。

（第3回）　9月10日

(1) 本年度分の学生図書購入費の実施方法は人文系40％自然系30％社会系30％の割合とし一般教養図書と共に選定することとした。

■ 東部地区図書委員会報告

（第7回）　7月13日

(1) 指定図書選定を行った。

(2) 前回承認された図書購入費の内訳は人文・社会・自然科学、各々27万円と決定した。

（第8回）　9月17日

(1) 国大協図書館特別委員会の←「大学図書館予算及び図書館学拡充強化に関するアンケート」は9月27日の附属図書館委員会で審議回答となった。

■ 図書館維持費検討委員会報告

（第3回）　6月15日

(1) 指定図書購入費維持費70万円の実施方法と分担について承認した。

（第4回）　7月19日

(1) 本館維持費及び教養図書購入費の東部学部等の分担について審議した。

（第5回）　9月20日

(1) 本館維持費の東部学部等の分担について継続審議した。

■ 昭和45年度 増加図書統計

分類	本館			工学部分館			農学部分館		
	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
0総記	529	216	745	116	2	118	27	0	27
1哲学	379	332	711	17	3	20	1	0	1
2歴史	829	148	977	64	0	64	24	0	24
3社会	1,869	599	2,468	67	1	68	117	3	120
4自然	1,084	1,122	2,206	689	622	1,311	389	276	665
5工業	327	51	378	1,003	432	1,435	196	49	245
6産業	204	27	231	19	0	19	700	227	927
7芸術	241	32	273	19	0	19	6	2	8
8語学	376	283	659	23	5	28	12	0	12
9文学	913	812	1,725	27	0	27	10	0	2,039
計	6,751	3,622	10,373	2,044	1,065	3,109	1,482	557	2,039

おしらせ

(1) 雑誌窓口の変更について

従来の雑誌窓口はなくなりましたが雑誌閲覧は普通図書窓口で受付けます。

(2) 投書箱の新設について

各階閲覧室に投書箱が置かれました。これには図書館に対する御意見、御希望等なんでもお寄せ下さい。特に購入希望図書に関しては次の様な用紙が備えつけてありますので御利用下さい。

購入希望図書申込書	月　日	NO：	申し込む前に、必ずカード目録で検索して下さい。
学籍番号 —	学部　年	・発売中 ・年　月頃発売 ・発売予定	購入可否
著者名			
書　名		定価	月　日から、月　日までカウンターに別置しておきます。
出版社	摘要		に排架済 排架位置 →

希望のありました本・雑誌等は図書館側で選定し、購入の可否が決まります。その結果は3階カウンター窓口前（投書箱付近）に掲示されますので御覧下さい。

（4ページよりつづく）

講演会終了後参加者に対するアンケート調査を行った結果、当館員からは予備学習及び当館の現状問題分析時間の不足、事前のＰＲ不足による図書委員の不参加等が指摘され、今後の希望事項としては、実務的なもの（レファレンストゥールの使い方や紹介）、事務合理化に関するもの、図書館界外の講師によるサーヴィスの話、等々が挙げられた。又今後も講演会を継続すべきことは内外参加者の一致した意見であり、特に学外者からは県内でのこの種の研修会が少ない折から当図書館が今後共是非積極的に県内大学図書館員研修の役割を担って欲しいとの声が強く寄せられた。これに対し講演会担当者側は大いに心強さを感じたが、図書館職員であること以前の問題、現実と理論のギャップの問題、企画者側と講師側の姿勢及び認識の問題等を今後に残された課題として取り上げた。

静岡大学附属図書館「図書館通信」№12　　1971年11月10日発行
発行所　静岡大学附属図書館　静岡市大岩836　TEL(85) 1175
印刷所　文　化　洞　静岡市大岩1185　TEL(45) 6260